そう言う僕らは人でなし

踏鞴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そう言う僕らは人でなし

【Ｎコード】
Ｎ４７８６Ｘ

【作者名】
踏鞴

【あらすじ】
この世界は酷くつまらないものだと思っていた。そんな僕に転機が訪れたのは7月、彼に出会ってからだった――。これは決して“みんな”の中には加われない主人公とそんな主人公の為なら命を投げ出すことも厭わない少女、自分を殺した少年が苦しみながらも前へ進んでゆくお話、だと良いな。

犯人は誰？　1

僕の住むこの世界はつまらないものだ。

たった13年しか生きていない僕が下した結論はそう言うものだった。

毎日当たり前に学校に行き、当たり前に食べてあまり前に寝て。その繰り返し。何も面白いことが無い。

そんな風に思っていた僕は、だから当たり前のように周りから見れば捻くれていたのだった。

朝、いつものように登校する。

入学当初はドキドキしていたこの通学路も、さすがに二ヶ月も通えば慣れてしまう。

特に今は七月。ただただ暑くて、僕の体力を確実に奪っている。

でも暑いからだるそうにしているって言うのはなんだか夏にまけた気がするので意味も無く笑ってみる。ぐへへへへ。近くにいた小学生に変な目で見られた。

交通事故でも起こらないかなあ。

物騒極まりないがそんな風にさえ思ってしまうのは僕の悪い癖だ。直そうとはしているがこいつとはもう5年ほど付き合っているのでなかなか直せない。逆に最近は愛着までわいてきているのだからもうどうしようもない。

しかし僕がそんな風に思ってもどうやら日本のドライバーさんは安全運転を心がけているらしく、生まれてこの方そういった場面には遭遇していない。まあそれが一番なのだがひねくれている僕には少しばかり残念に思えてしまう。

そう思う僕はどうやら死んだ方が良いらしい。

余談だが僕は今までに二度、交通事故に遭っている。

どちらも自転車で、ここまでで僕の性格を把握した方は分かると思うがどちらも自分から轢かれに行った。まあ日常に飽きたのでなにか変化が欲しかったのだ。本当は異能者集団と単独で戦うもしくはハーレムを作る方が良かったのだが、残念ながら現実にそんなことは起こらない。

交通事故の一度目はどうやら自転車に乗っていた人の反射神経が良かったらしく、僕も自転車のドライバーも軽傷で済んだが、ここで済めば良かったのだが残念なことに僕は軽傷では失敗だと思っていたので、その数週間後にもう一度轢かれた。もちろん一度目とは違う人間だが。

それで思いの外重傷を負ってしまった。

自転車って結構殺傷能力あるんだなあと思った瞬間だった。

まあそれで意外と恐かった上、入院生活は退屈の最上級だった為それ以来わざと轢かれる様なまねはしていない。

いや、お前自分から轢かれるとかどれだけのレベルで馬鹿なんだよ。とここまでの話でお思いになる方も居ましょうが、全くもってその通りであり、反論の余地など全くといって良いほど無い。あの頃の僕には素直に反省しかない。

いや、言うほど反省もしてないけど。

そんな訳で。

「おいおい、入学四月で二ヶ月しか経ってないんだったら今はまだ六月の筈だろ？」

と言う質問に対して僕は学校が始まる前に入院してたんだよ。と言う答えを返すことが出来る。

まあこれも頑張れば学校に行けたのだが、学校なんていったって大して実る物などないし、一ヶ月遅れで入学するのも何か変化があ

るかもしれないと思ったからだ。
まあこれもまた僕は馬鹿で、一ヶ月遅れの新入生に対して学校側は良くあることなのか、普通に次の日からは他の生徒と同じ扱いだった。しかも学校生活でも特に何も起きず校内での僕の立ち居地はかなり友人の少ない普通の人となってしまったのだ。
友人が少ないのは言うに及ばす、僕の性格によるものと、一ヶ月遅れの入学が災いしたのだ。本当にやることなすことマイナスにしかならない僕であった。

閑話休題。

繰り返して言うが学校はつまらないところだ。否、世界はつまらないところだ。
しかし今日に限って言えば、そうともいえないかもしれない。

その答えは、僕が登校してきた学校の、昇降口にありそうだった。

ここで『ありそう』などと言うまったく明確でない言葉になってしまったのは本当に申し訳なく思うがしかし、何が起こっているのか僕にもわからないのだからそれは仕方ない。僕の所為では全く無い。

まず校舎に入れないのである。
校門は硬く閉ざされ、殆どの生徒はそこで学校への行く手を阻まれている。幾人かの教員が校門の前に立って何か叫んでいが、残念ながら子供達の喧騒に包まれその声はここまでは届かない。
それでも予想してみるに「少しここで待ってて」的なことを言っているらしい。
そして件(くだん)の昇降口である。

そこには何人かの警察、そして何人かの救急救命士、もしくは簡単にお医者さんが居た。しかしそれだけであって何をしているかまでは全くわからない。強いて言うなら近くに救急車があり、恐らくはその中に誰がが乗せられて今現在治療を受けているのだろうと予想できるがそれだけだ。

救急車なのだから病院にいかないのかな？　と思っていたら発車した。しかしそのためには今僕達が居る校門を通らなければならず、生徒達の誘導などで幾許かの時間が掛かったことはここに明記しておこう。

なんだったのか。

何が起こったのかは全くわからないが、しかし、僕の日常をぶっ壊してくれそうなそんなエネルギーを伴った事件ではあった。

しかし現実はそう劇的ではない。

その後、２０分遅れではあるが普通に授業が始まった。遅れた分の２０分はなんと僕らの昼休みから削り取られるらしい。

無論、今朝のことに関して、生徒から質問はあったが、それに対する担任教師の答えは「私も分からない」というなんともそっけない返事であった。

退屈だ。

心の底からそう思っていた、そんな１０分休憩の最中であった。

「よう、同級生！　俺とつるまねえか？」

そう声が掛かってきたのは、一時間目が終わってすぐのことだった。
一時間目の終了を告げるブザーが鳴って僕はすぐに睡眠の体勢に入ったのだが、突然現れたその男子生徒に邪魔されて、僕は少し不機嫌ながら対応する。
その男子生徒はよく知っている顔だった。とはいっても知り合いと言う訳ではなく、ただあっちが有名で一方的に知っているだけだ。きっとあっちは僕の名前も知らないだろう。
そいつは中学一年にしては大柄で、筋肉質であった。顔も整っていて、こういう奴は女子にもてるんだろうなあと柄にも無く羨ましく思う。頭がスポーツ刈りなのは部活動に影響させない為か。

「僕の名前は同級生じゃないぞ、同級生」
「そうだな、悪かった。じゃあもう一度。よう雨屋夢（あめやゆめ）！　俺と一緒にさっきのあの事件解決しねえか！？」

あっけからんとそう言う男子生徒に、僕は驚くほか無かった。それは後半の台詞についてではない。前半の台詞だ。

「……ん？　どうしたんだ？　アホみたいな顔して」
「いや、なんでもないぞ。僕はこの顔が基本パターンだ。さっきまでのは『休み時間が２０分も削られるとかあり得ないだろコンチクショウ』って教師に無言のアピールをしていただけだ」
「ものすげえ限定的だな」

言うまでもなく嘘である。本当はこいつが僕のフルネームを知っていた事実に驚愕していただけ。クラス内において僕の存在は買ったはいいが水遣りが面倒で変色してしまった観葉植物と同じくらいの低さなのに。
しかしこいつは僕の嘘にだまされること無く（当たり前だ）、し

かも僕が驚いている理由を明確に当てて答えやがったのだ。

「おいおい、クラスメイトの名前ぐらい把握してるっつーの。そうでなくてもお前は後から入ってきて印象的だったしよ」

……ああそうか。いくら僕が地味とは言え、学年で友人が片手の指の本数を超えないほどの友好関係の持ち主とは言え、遅く入ってくるというアドバンテージがそこで生きてきたか。まあ殆どの生徒には関係ないだろうし、そもそも目立つこと事態それほど好きな訳ではないけれど。

観葉植物から外国土産の置物ぐらいにはランクアップしたかな？

いまだ人には程遠いけど。

「んじゃ夢、お前その調子じゃあ俺のこともしらなそうだからな。自己紹介しといてやるよ」

「いや、その必要はないのじゃ」

彼を制し僕は続ける。ジジイ言葉に意味は無い。ちょっと仙人っぽく言ってみたかっただけ。

「宝島減太（たからじまげんた）、６月１３日生まれの１３歳。成績良好スポーツ万能容姿はそれなり以上。部活はサッカー部で風紀委員会所属過去に４人の女性と交際経験があり、何れも１ヶ月と立たないうちに振っている。基本的に相手を見下して生活していて基本的に自分以外を認めないし許さない」

「おお、すげえな。特に最後なんてピッタンコだ。なんだ夢。俺のファン？」

「違う、人間観察が趣味なだけだ。それから夢っていうな」

因みに僕はれっきとした男である。故にこの名前は気に入ってな

い。

「さすが俺の見込んだ男だぜ。じゃあ俺がおまえとつるもうって理由は分かるよな」

ぐへえ。

僕は宝島のその言葉に多少の霹靂と吐き気を催しながら口を開いた。

「その前にまずそこだ。さっき聞いたが、そのつるむってのはあれか？　さっき起こった良く分からないことを調べようってのか？」

「だからそういっただろ。それとも嫌か？」

「それは全く嫌じゃない。それどころか望むところだ」

退屈から抜け出せるような気がした。僕にとってこの誘いは願ったり叶ったりだ。しかし、

「宝島。お前さっき事件って言ったよな。お前はさっきのあれ、何が起こったのかわかってるのか？」

「ああ。人望に乏しいお前じゃ出来ない聞き込みって奴だぜ」

携帯電話をぶらぶらさせながら宝島は言った。どうやらこの男、一時間目の最中ずっと携帯で誰かとコンタクトを取っていたらしい。どうでも良いがそのドヤ顔やめろ。確かに僕は携帯持ってないけど別に羨ましいとも思ってないからな！

……友達がいないから。

「じゃあ何が起こったのか教えてくれ」

「ああ、いいぜ。その代わりお前が仲間になってくれると約束してくれたらな」

「……」

はっきり言って嫌だった。この宝島減太と言う男は良くも悪くも目立つ。対して僕は前述の通り学校の中では最下層に居る自負さえある。平たく言うと地味だ。そんな僕らが一緒に居るとどうだろうか。好奇の目で見られること間違い無しだ。それは出来れば避けたい。

というかなぜ僕なのだろうか？　そういった疑問を素直に宝島にぶつけてみた。本当はそんな目立つ彼と一緒に話している姿も他の人には見られたくなく、宝島とは大正時代の遠距離恋愛よろしく文通とかで意見交換をしたいものだったが、流石にそれは面倒だ。

で、答えだが、

「だって俺とお前同類だもん」

そういう答えが返ってきた。

同類って何だ？　お前も外国産の置物か？　そう言う目で見れば確かにフランス、イギリス辺りで売ってそうな顔立ちではあるが。

っていうかどこが同類なものか。寧ろ真逆だろうに。

僕がそんな風に考えあぐねていると、宝島が降参したように両手を挙げながら言った。

「わーったよ。じゃあこうしよう。今回だけだ、俺とお前がつるむのは。それ以降はお前が勝手につるむかどうか決めてくれ。多分一緒に居れば俺とお前が同じだって分かる筈だ」

きっと宝島にしてみれば最大限に譲歩したのだろう。であるならばこちらとしても誠意を見せなければいけない。

言い換えれば宝島が話す内容の誘惑に負けた。

「わかった。今回は協力してやろう」
「おお！　マジか！」

宝島が分かりやすく喜んだ。
しかし後から考えてみれば、その事件（？）の内容も知らないのに同盟を結ぶとか、僕らしくない。慎重さに欠けていた行動だった。

「じゃあ今朝起こったことを言うぞ」

そんな出だしで宝島は話し始める。

犯人は誰？　2

結局その後宝島から説明を受けることは無かった。宝島が話そうとしたその瞬間、１０分休憩が終わってしまったのである。

「んーじゃあ放課後な」

何故か知らぬが、宝島はそれ以降１０分休憩には話しかけて来ず、上記の言葉を残したまま結局は放課後になってしまった。

放課後、誰もいない教室である。
こういう状況は少しばかり興奮してしまう。何かが起きそうで。
まあ誰も居ないと言いつつ僕と宝島は居るのだが。その宝島と二人で向かい合い、話を再開した。

「減太でいいって」

無視した。

「早く話せ」

話せとは無論、今朝起こったことについてである。

「焦らすなよ。まあ特に改まって言うほどのことではないんだけどよ――」

宝島の話を要約するとこんな感じだった。

朝、なんでもないいつもどおりの登校風景である。その中で一人の女子生徒が歩いていると突然倒れた。驚いて彼女を起こすとなんと腹部に小さめのナイフが刺さっているではないか。周りに怪しげな人物など無く、同じ様に登校していた生徒からも目撃例は無い。しかし彼女には深々とナイフが刺さっていたのは事実である。一体誰が、どんな目的で、どのような手段で、このようなことをしたのか。警察当局でもいまだその事実は掴めていない。

……ニュース調にしたのは僕だ。そして後半の警察云々は全くの嘘である。もしかしたらもうすでに犯人の特定は済んでいるのかもしれない。

「まあ警察がもうすでにって線は多分無いだろ。どう考えても不可能犯罪だし」

「はっ、それでその犯罪捜査に僕も付き合えと？　真っ平ごめんだね。恐いし」

急にキャラと語調を変えて立ち上がろうと腰を上げる。内容には興味津々だが、このレベルであれば一人で何とかできるかもしれない。宝島には悪いがここは嘘をついて退散しよう。

別に珍しいことじゃない。嘘をつくことも、裏切ることも。

しかし、

「嘘をつくな！」

突然の宝島の大声に、僕は帰ろうとしていた足を思わず止めてしまう。それだけ彼の大声が意外だったという事だ。

「お前はこの事件に興味を持っている筈だ。否、『楽しそう』と思ってるはずだ。嘘はいけないぜ？」

「おいおい、君は心でも読めるのかよ」

ドンピシャだ。しかし僕の唯一の特技が嘘であるのにそれを見破るなんて。僕は諦めて椅子に座りなおす。

「言ったろ、同類だって。同類の嘘は見抜けるさ」

「……じゃあお前の考えてることも当ててやろうか？」

「……」

彼が自分と同類であるなら間違いは無い筈だ。

「お前は犯人を捕まえようとは考えてないな。犯人を探し出した上で、そいつも仲間に取り込もうとしている。どうだ。間違いないか」

「ご名答だね。さすが我が心の友」

「心の友言うな」

まあ推察というか、自分がしそうなこと言っただけなんだが……。しかしあまり声を大にして言いたい話ではないが、どうやら確かに僕と宝島は同類らしい。思い起こせば宝島の人間観察をしているときにあの人を人としてみていない態度とか、時折見せる剣呑な雰囲気とかどこか通じるところはあったが……。

しかし普通僕の同類とされる人たちは僕のように周りに気づかれぬように、正体がばれぬように生きて行くのが常だというのに。コイツは自分を隠すのが僕らの中では抜群に上手いらしい。

「じゃ、話もまとまったとこだし行くか」

宝島がそんな風に言って立ち上がる。不意に見下されるような感じになって精神年齢が永遠の0歳である僕としてはよろしくない。

僕も続けて立ち上がるが目線はいまだ僕より上だ。あ、宝島の方

が僕より背、高いからか。チッ！

「行くってどこにだよ」

「付いてくれば分かる」

そこは第二音楽室だった。

おいこら宝島。全く分からないぞ。

そんな僕の心配を余所に宝島は躊躇うことなくその音楽室の扉を開けた。

「失礼しまーす」

「ん、いらっしゃい」

中には一人の女性が居た。逆に言えば広い第二音楽室、ただ一人の女性が占拠していた。

その女性は茶色のくせっ毛が特徴で、なにやら人を食ったような笑顔を僕らに向けた。

「私の名前は御船御影（みふねみがけ）、2年2組さ。これ以上の情報は私から買うんだね」

結構分かりやすい台詞であった。とどのつまりこの先輩は情報屋か。さっきの朝起こったことってのも宝島はこの人から買ったのかもしれない。

「じゃあ今朝の続き、被害にあったその女性の情報と、できればもっと詳しい事件背景をおしえてほしい」

こういった状況に慣れているのか、宝島は臆することなくそして敬語を使うことなく御船先輩に話しかけた。

「はいはーい。でもその前にちゃんと料金は支払って貰わなくちゃね」

「料金？」

御船先輩の突然の言葉に、僕は思わず声を上げてしまった。

そうか、そりゃあ無償でやってるわけないもんな。しかし金が掛かるのか。健全ではない人だな。

「そ、料金。といってもお金じゃないわよ。私の知らない情報を教えて欲しいの」

僕の心を読んだようにそんな訂正が入る。

「ああ、情報な。“もって来たぜ”」

宝島が僕の方を指差す。え？　僕？

「聞いて驚け。こいつは俺と同類だ」

宝島のそんな声を聞いた途端、明らかに御船先輩の表情が苦々しくなる。

「……どうやら嘘ではないみたいだけど。しかし何故かしらね。私、今年の一年生はちゃんと全員チェック入れてたはずなんだけど」

「それなら安心しろ。あんたのミスじゃない。コイツは一ヶ月遅れでこの学校に入学したんだ」

成る程。僕は妙に納得していた。

宝島は別に一人でも捜査が可能だったにも関わらず僕を誘ったのにはそう言う側面もあったわけだ。つまりは情報を得る為の料金として。

「あー、そいいうことかー。いや、完全に私のミスだわ。たとえ後から入ってきた人でもちゃんとチェックしないと。

まあよろしくね、……えーと」

「雨屋夢です。よろしくお願いします」

「うん、よろしくね夢ちゃん」

「……」

前回も言った気がするがこの名前はあまり好きでは無い。女っぽいからだ。しかもちゃん付けって。

でも先輩に対して「夢ちゃんっていうなやあ！」とか言うのは僕のキャラじゃないので諦める。

「ふーん、ふーん」

そんな僕考えていることでも分かるのだろうか。明らかに僕を品定めするように見る御船先輩。

「うん、確かに減太と同類、人でなしだね」

「人でなしって……」

「言い方が気に入らなかったかしら？　私らの間ではそう呼んでいるだけであって、別に呼称なんてどうでもいいんけど。何がいい？

異常者でも精神的患者でも。そういえば3つ上の先輩は心喰らい

と呼んでいたっけ。まあ夢ちゃんの好きなように呼んで頂戴、なんならスーパーマンだって構わないわよ。頑張れそばう見えないことも無くはないし」
「いや……人でなしでいいですよ」

僕らを言い表すにはぴったりな言葉だろう。
人でない。故に人でなし。そのまんまだが、僕は確かに人とは違う。生物学的な意味で。

「因みに君のタイプとしては結構一般的ね。厄介なのは精神が最悪のクセに知能面でのバロメーターが若干高いってことかしら。まあ世間一般の目で見れば平均的なそれだけど。普通あなた達のような人でなしって全てのバロメーターが最低ラインを漂っている筈なんだけれど。将来完全犯罪者にならないように気をつけることね」

御船先輩が鞄から取り出したｉｐａｄを操作しながら言った。そこら辺の情報は握られてるのか。
っていうかだとすれば僕の隣に居るこの男はどうなるのだろうか？　僕たちの中では完全に異質だし、学習面でも運動面でも飛びぬけているぞ。
そんな僕の表情を察したのか御船先輩が続ける。

「ああ、減太のこと？　減太は例外中の例外よ。私もいろんな人でなしを見てきたけど、ここまで社会適応率が高くて運動も勉学も出来る例なんて見たことないわ」
「照れるな」

とは言いつつ全く表情の変わらない宝島。ここら辺は人でなしらしい。

「そんなことより被害者の情報を早く教えてくれ」
「もっと雑談できる余裕が無いと将来やっていけないわよ？　でもまあいいでしょう、分かったわ。被害者の女性は１年３組３４番橋場小子。あなた達と同じ学年ね。学習面、運動面共にクラス内では最下層で、それを原因として一部の女子からいじめの前兆みたいな物を受けていたわ。でも本人は特に気にしている様子もないし思いつめてる風でもなかったけど」
「……てことはあれか？　その橋場ってやつをいじめてた奴が今回の犯人か？」

少し考えてから宝島がそういった。

「そんな訳ないだろ。いじめって言っても軽い物だって先輩言ってたじゃねえか。そんな人の命に関わるような真似、普通の中学生はしない」

間髪入れずに僕が返す。なぜだかコイツは頭が良いのに抜けてるところが多い。

「むう、そうか」

と、宝島は納得したらしいのだが、

「その相手が普通の中学生だったらね」

思わぬところから反論が来た。御船先輩だ。

「あんた達のように人でなしだったらどうする？　いじめてたは良いけれど、あんまり面白い反応示さないから間違ってやっちゃいましたって、そう言うこともありえるんじゃない？」

そりゃそうか。普通で図っちゃ駄目な事件だったな。
「じゃあやっぱりいじめてた奴等が犯人か。……御船、その橋場って奴をいじめた奴の名前を教えてくれ」
「嫌よ」
宝島の要求を突っ張る御船先輩。
「流石に夢ちゃんが人でなしって情報だけでここまでは教えすぎだわ。知りたかったらまた新しい情報を持ってくることね」
意外とシビアな先輩だった。

そう言うわけで。
早くも手詰まりのこの状況だった。
僕らは自身の教室に戻り、二人、考え込んでいた。
「というか宝島、お前部活行かなくて良いの？　今日もサッカー部は練習だろ？」
「いいの。どうせあんな練習参加しなくてもレギュラー取れるから」
「……ホントに、才能とか持ってる奴は羨ましいな」
「才能だけじゃない。人望も友人もお前の比じゃないぜ」
「へーへー、羨ましいことで……あ」

「ん？」
「お前もやれば良いじゃん」
「何を」
「情報収集」
「あ、そうか。何も御船だけの専売特許ってわけじゃないもんな」
「そうだよ。お前のその人望を生かすときがついに来たんだ」
「じゃあ早速行ってくるわ」
「任せたぞ」

そんな感じで。
当初は意気揚々と出かけていった宝島であったが、そんなテンションもその二時間後には完全に崩れ去っているのだった。

犯人は誰？　さん

５文字で言うと、駄目だった。
分かったことがない訳じゃない。もともと僕らは、橋場小子をいじめていた人物を特定して、そこからとりあえずその時間に犯行が可能だった人を容疑者として調べようと思っていたのだが、結果は大体みんないじめっ子。だった。
どういうこと？　橋場小子はみんなからの嫌われ者。と言うこと。
御船先輩情報では一部の女子がいじめてたってことになってたけど、それはあくまで酷いいじめの話で無視だとかそう言うことはクラスぐるみで行われていたらしい。マイナス方向には無駄に団結力のあるクラスだった。
大体どこでもそうか。

容疑者の特定が出来ない。というかそれで特にいじめを気にしていなかった橋場小子はかなり大物だ。
そう言うわけで、僕らは早くも暗礁に乗り上げてしまったのだ。

次の日。平日。

「やっぱり本人に聞くしかねえよな」

例によって例のごとく１０分休憩に呼んでもないのに登場した宝島減太はそう言った。

「本人と言うのは橋場小子？」
「それ以外に誰がいる」
「犯人」
「それが出来たら苦労しねーよ」

しかし僕らにとって残念なことに橋場小子本人に聞くという選択肢は、犯人に直接聞くというのと同じくらいかそれ以上に苦労するのである。
なぜなら彼女は学校に登校してきていないからである。当たり前だが、お腹に穴が開いた次の日に学校に登校してくる奴はもう人間じゃない。そもそも確か警察に事情徴収されているという話である。
でも、

「うん、そうだな。やっぱり橋場さんに聞くか」

それ以外に方法はなさそうだ。

「ん、何か良い手はあるか？　橋場と接触する為の」
「普通に行ってもどうせ会えないよな」
「友達でもなんでもないしな」

そこから僕らは数分話し合った後、「無理だな」という結論に落ち着いた。
そう言うわけで今度は別の視点から考えてみる。

「もし仮に、その犯人が僕らと同じ『人でなし』だった場合だけどさ、宝島って僕を見て同類って分かったわけだろ？　だったら校内を適当に徘徊してコイツだってのをマークしてれば良いんじゃないか？」
「そんな発見器みたいなことできるか。お前の場合はお前が入学してきた時に「コイツなんか変な奴だな」と思ってそれで2ヶ月間じっくりみて分かったんだ。ぱっと見じゃあ無理」
「んじゃ次。犯行方法から考えてみる」
「……ナイフを投擲したとか？」

「でもそれだと必ずしも橋場さんに当たるとは限らないよな。あの時間帯ってかなりの数の生徒が登校してきたんだろ？　それに誰も投擲するところを見ていない」
「別に橋場を狙ったわけじゃねえんじゃねえの？　たまたま投げて、たまたま当たった」
「それなら誰も投げるシーンを見ていない説明にはなってない」
「わーってるよ」

これで他の策も尽きた。後はまあ超能力的な何かと言う線もあるけれど、探し出すのも立証するのも難しそうだ。というかその線が当たってしまったらどうだろう？　立ち向かえる気がしない。
そんな感じでぬーん、と二人して唸っていると、授業の開始を知らせるブザーが鳴った。宝島はそれを聞くとすぐに席に戻り、僕も授業の準備をする。
どうやらこの事件は迷宮入りになりそうだ。
警察の皆さんが事件を解決することを祈ろう。

「なんつってー」

午後１１時２２分、私立病院前。勿論僕一人。
さて、何をしにここに来たかは言わずもがな、橋場小子との接触を図る為だ。
忍び込む為になるべく遅い時間にここにきたが、平均睡眠時間が１０時間の健康優良児にこの真夜中はキツイ。僕は欠伸をかみ殺し

て目の前にそびえ立つ病院を見つめた。
夜の病院ってのは普通ホラースポットの筈なんだけど、まだその建物が仕事を続けている間はそんな雰囲気なんて全く無く、寧ろ一種の威圧感さえも感じる。なんか無性に敬礼とかしたくなってきた。

「敬礼」

なので敬礼をした。ただし、人に見つかると面倒なので駐車場にある植え込みと車の間に隠れながらの敬礼ではあったが。礼してる感が全く無い。

敬礼を止め、今度は三階のとある部屋を見つめる。そこが橋場小子の部屋だ。
因みにこの情報は「僕、この学校に友達3人しか居ないんですー」という情報と交換で貰った。

「確か一人部屋……三階だったらいけるか」
「敬礼！」

僕がそんな風に計画を立てていると突然大声が。始めは誰かに僕のことがばれたと思ったが、よくよく考えてみれば叫び声が明らかにおかしいし、それに聞いたことあるような声だった。
というか宝島だった。

「何してんだお前は！」

静かに、しかし滑らかに。僕の芸術にも値する美しい飛び膝蹴りは吸い付けられるように宝島の顔面を襲った。

「お、夢じゃん。よかった見つかった」

しかし美しさとは反比例して威力はデコピン程も無かったので宝島は毛ほどのダメージも受けていないようだった。むしろ僕の膝が痛い。

「なぜお前がここにいる。貴様にはこのことは言ってないはず」

敵意丸出しで僕が言う。しかし膝を摩りながら。

宝島から見れば微笑ましい光景だろう。

「御船に教えてもらったんだよ。……押し売りだったけど」

そうか、御船さんに。じゃあ仕方ないな。来たものはしょうがないしいいか。

「帰れ」

「おい、地の文といってることが真逆だぞ」

「仕方が無い。しょうがないけど帰れ」

「おいおい、昨日からずっと思ってるんだがなんでお前、俺のことそんなに敵視するんだよ。俺とお前は友……ふわあ……達だろ？」

「大切なところで欠伸するような人は僕の友達とは認めません」

「そんな紀元前のお母さんみたいなこと言うなよ。仲良くしようぜ」

「いや、紀元前のお母さんってどんなのか知らないけど」

「大体お前友達三人も居ないだろ」

「……！！」

思わぬところから攻撃が来た。

なぜ僕が御船さんに売った情報まで知ってるんだこいつは。

確かに僕には友人が居ない。今まで片手で足りるとか、数人とか、少ないとか色々僕に出来る言い回しを駆使して明言を避けてきたけ

れど、はっきり言ってしまえばこの学校に僕の友人と呼べる人は実は一人しか居なかったりするのである。宝島じゃないぞ。他のクラスの奴だ。

「御船は嘘を見抜くのが得意だからなー。でもなんか面白そうだから教えてやったっつってたぞ。あと、これが終わったら御船の所に行って今からすることの報告しろって」

「……」

最早これ以上の抵抗は無理か。

御船さんに図らずもではあるが無償で情報を貰う形になり、いわば借りを作ってしまったことになるのだ。それで、御船さんの使いであるこの男をあまり邪険に扱うことも出来なくなってしまった。

まあコイツが御船さんの使いであるかどうかは意見が分かれるところだろうが。

「……付いて来い」

「流石我が心のと……ふわあ」

「もう良いよ」

そう言うわけで僕ら二人は橋場小子の病室の真下に到着した。真下といっても外であるが。

三階、意外と高くて上れるかどうか不安だった。でも上ったらあとは簡単そうだ。この時期は夜でも暑く、橋場小子は窓を少し開けて寝てしまったようだ。少し開いた窓が見える。

「うし、上るぞ」

僕は橋場小子の部屋のすぐ脇を通っている雨どいに手を掛ける。

「無理だ……」

思いの外きつかった。体重の軽い僕ならあるいは簡単に登れるかもしれないという憶測が遥か彼方へ飛んでいった。簡単に、どころか足が地面と離れた途端に僕は重力にしたがって落下する。これじゃあ三階なんて絶対に不可能だろう。

「そんなことだろうと思ったよ」

僕のすぐ後ろであざ笑うかのように宝島が言った。何だお前だったらお前に出来るのかよコンチクショーとか言いたかったが数分間登ろうと頑張った為、僕の元々少ない体力がもう極限まで削り取られていた。要するに声を出すこともままならない状態である。

だから目からビームを出さんばかりに睨んでやった。

おいコラァなめとんのかワレェしばきまわすぞボケコラァハゲェ。

「ほれ、乗れ」

すると突然宝島が訳の分からない行動に出た。

僕の方に背を向けてしゃがみ込んだのだ。

なんだ？　刺して良いのか？　それとも殴って良いのか？

「早く乗れ」

宝島が繰り返して言う。よくわかんないけど乗れば良いのか。

僕は宝島の体で足をかけれそうな所を探す。肩が良いか。無難で。

そして宝島の肩に僕の足を乗せ、思いっきり体重をかけた。

「いでででで！　何すんだ夢！」
「お前が乗れって言ったんだろ」
「そーじゃねーよ！　このかっこうしたらおぶるってことだろ！」
「先に言えよ」
「分かれよ」

僕は宝島の言うとおりに渋々宝島の背中に抱きつ……。

「やっぱりヤダ。気持ち悪い」
「酷い事言うなよな、お前だって気持ち悪さでいったらどっこいどっこいだろ」
「だったら尚更だよ。気持ち悪い物と気持ち悪い物が密着した日にはどんな化学反応が起こって何が生まれるんだよ。最早世紀末だよ」
「なにも生まれねーよ。たとえ生まれるとしてもベトベトンレベルだから安心しろ」
「やだよ、それ、すげえ気持ち悪いじゃん。せめてカビゴンあたりにしてよ」
「分かった。じゃあメタモンあたりでどうだ」
「……わかった。それじゃあ仕方ない」

仕方ないも何も、根本的な解決になってないことに気付く物はこの場に居ない。
しかしかくして、二人の合体新ヴァージョン、宝屋夢減（たからやむげん）が誕生した。……合体ってちょっとエロい。

「別に誕生はしてねーけどな」
「そんなことより宝屋（下）今更だがどうしてこの体勢になったのだ？」

「そんなことも分からないのか夢減（小）。この体勢だと二人で三階にいけるからだろ」
「（小）とか言うな宝屋（馬）」
「うっさいｓサイズ」

そう言うや否や宝屋は僕を担いだまま、雨どいをどんどん登っていった。おいおい、どんな筋力してんだお前。
そんなことを思っているともう三階、つまり橋場小子の病室についてしまった。

「流石に疲れたな……」
「それは俺の台詞な、夢」

もうベランダに着いたときに二人の合体は解いたので宝屋夢減はいなくなった。

ふう、と一息ついて病室を見渡す。一人部屋にしてはなかなか広い部屋だった。親が富裕層なのかもしれない。窓は下から見たとおり鍵が掛かっていなかった。
すすすと静かに開ける。橋場さんに聞きたいことがあるのだから結局は起こしてしまうことになるのだろうけど、せめてこんなかっこ悪い登場シーンは見せたくなかった。なんか、男として。

「……」
「……」
「……」

見られていた。
誰に？　橋場小子に。
どうやら彼女は起きていたようで、ベットに寝てすらいなく、た

だドアの前に立って、僕らの方を睨んでいた。

でも僕ら――僕と宝島が無言になったのは、橋場小子が起きていたという驚愕の事態に頭が対応できなかったからではない。寧ろ最初にその姿を確認した時は起こす手間が省けたなーとか暢気にも思っていたぐらいである。

ではなぜ黙りこくってしまったのか。勿論驚いたからである。しかしそれは彼女が起きていたこととは全く関係が無い。仮に彼女が寝ていたとしても僕らは同じ反応を示しただろう。

僕らが驚いた本当の理由、ここで書くまでもない。処理が遅れ気味だった脳が、やっとこさ仕事が終わったらしく驚きを言葉として口から出してくれた。

「「あ、犯人が分かった」」

しかも宝島と被った。

犯人は誰？　４

僕の話をしよう。
僕は出来る奴と言うのが嫌いだ。
僕は頭の言い奴がテストで０点をとる状況を想像すると自然と笑みが零れてしまう。運動の出来る奴の両手両足が折れる姿を常日頃考えている。友達が多い奴のいじめられている夢を見ると気持ちが高ぶってしまう。お金持ちの奴の会社が倒産する話を聞くと勝手に破顔してしまう。

でもそんなことは実は殆ど起こらない。
ヒーローはいつまで経ってもヒーローだし、出来る奴は歳を追うごとに僕らとの差がはっきりしてくるし、主人公は負けを知らない。
本当に、悔しい。羨ましい。
だからもしかすると僕のこの日常嫌いもそれに由来するのかもしれない。
日常ではない非日常では“何かが起こる”。
その“何か”の殆どは上記のような出来る奴のレベルが上がる話だ。でもその中に極稀に、出来る奴が出来ない奴にかわる話が混ざっている。
僕はそれを見たい。
たとえ誰になんと言われようと。
その為ならなんだってしよう。自転車にだって轢かれてやる。
まあ流石にこれは意味のないことだって分かっていたけれど。

けど。
そんな僕でも、自分の為なら自転車に轢かれる僕でもまさか。
“自分で自分を刺せる奴”が存在するとは思わなかった。

「おいおい、おいおいおいおいおいおいおいおい。なんだよこいつ。何がどうなったら“こう”なるんだよ。なんでこいつはここまで“こう”なんだよ。

ありえねえ。ありえねえクレイジーだ。俺も人の事言えた義理じゃねえがこいつが人間の姿をしてここに立ってることが信じられねえよ。死神か悪魔が姿を変えてる訳じゃねえよな」

「うっさい」

咄嗟に隣にいる宝島に注意したが、僕も同じ感想だ。

橋場小子の外見について説明することはあまり無い。どこにでもいるような、どちらかといえば地味目な女の子だ。

しかし、雰囲気が全く違う。

気持ち悪い。この一言に尽きる。

そう言うのに耐性がある、どころか自分自身がそう言った存在なのにそんな僕でも圧倒的なその存在に吐き気や頭痛をもよおしてしまう。

だからだ。彼女のその姿を見た途端全てが分かった。分かったというかなにか、こう、分からされた感さえある。こんな圧倒的な女の子に刃物を突き立てられる奴なんてこの世に存在しない。逆に、彼女ならなんの躊躇いもなく自分を傷つけることが可能だろう。

「だれ」

彼女――橋場小子が初めて口を開いた。

「っっ！！」

初めに動いたのは宝島の方だった。

宝島の方が真人間にどちらかと言えば近かったからだろう。先に彼女の威圧感に耐え切れず、踵を返してベランダから飛び降りようとした。ここ三階だぞ。

「ぐっ！　――――ぎぃ！！」

しかし飛び降りることは叶わなかった。宝島は突然声を上げたかと思えば、その場に蹲ってしまった。

この部屋は暗くて良く分からないが、宝島が足を押さえているところを見ると、何かしらの攻撃を受けのだろう。それはきっと刃物だ。僕はそれを確信していた。

だとすると。

「いっ、っつ」

やっぱり。僕の肩にもナイフが投げられてきた。ナイフ？　いや、これは彫刻刀か。

幸いにも突き刺さりはしなかったので、その落ちた物を拾って調べてみた。だいぶ暗さにも目が慣れてきた。

しかしなぜ彼女は攻撃してきたのか。その疑問は残るが恐らく「なんとなく」とかそこら辺だろう。

大体彼女と同じ僕なら分かる。

目の前にいきなり現れた不審な人物。

攻撃しても『正当防衛』という“言い訳”が成り立つ。だったら危害を加えないわけが無い。

そう、僕らなら。

「橋場小子！」

だから僕は口を開く。

伝わるかどうかは分からないが、精一杯僕と同じ彼女に向かって言葉のキャッチボールを試みる。

しかしそんな僕に向かって彼女は、

「……」

明らかに臨戦態勢だった。

両手に構えるのは大きい物から小さいものまで、選り取り見取り、誰が見ても危ないと分かる大量の刃物だった。

「あ、いや……」

また口を開きかけた僕はあることに気がついた。彼女が僕に向かって投擲した彫刻刀を持ったままだったのだ。これなら彼女に警戒されても仕方が無い。

「これだね？　わかった。置くから話を聞いてよ」

僕がそんな風に言って、その彫刻刀を置こうとした瞬間だった。

突然、唐突に彼女はその場から動いたのだ。

標的は勿論僕だろう。

彼女は目にも止まらぬ速さで僕の正面に来たかと思えば、ほぼゼロ距離で、両手一杯の刃物を投げてきたのだ。いや、距離が距離なので投げるというよりは叩きつけると言った方が正しいかもしれないが。

しかし刃物は本来投げるものではなく切り裂くものだ。大量に持

っていて、投げ辛かったであろうことも幸いして、僕に付いた傷は僅かなものだった。
だが彼女の方もこれでは終わらなかった。またどこから取り出したかは知らないが一丁の恐らくは肉を切る用であろう刃渡りが２０センチ程もある大きな包丁を取り出した。
振りかぶる。
今度はちゃんと切り付けるようだ。正しい使い方、では絶対に無いがとりあえず僕の２秒後の将来が確定してしまいそうだった。死体である。

アーメン。
別に神など信じてはいないが、心の中でそう言って僕の冥福を祈った。そっと目を閉じる。

しかし僕の未来は第三者の介入によって変更された。
いつまで経っても体に別段変化が訪れ無いので、我慢が出来ずにそっと薄目を開けると、そこには壁に叩きつけられている橋場小子と、恐らくは僕を守ってくれたのであろう宝島減太が目に入った。

「勝手に生きることを諦めてんじゃねえよ！　殺すぞ！」
「おー、すげー。なんか仲間っぽいな、それ」
「仲間じゃなくて同類だろ？」

宝島の叫びに軽口で返すと、落ち着いた声で戻ってきた。案外コイツもノリで言っていただけかもしれない。

「……」

これは橋場小子。さっきからずっと喋ってないけど、機嫌でも悪いのだろうか。いや、口の中でも切って声が出せないだけかもしれ

ない。
　橋場小子はまた無言でナイフを取り出したが、今度は音も無く宝島に足ごと蹴り上げられて離してしまう。続いて宝島は女性である橋場小子の顔面を思いっきりぶん殴った。面白いくらい簡単に吹っ飛び、壁に激突。動かなくなった。

「すげえな」
「今、格闘技にも手ぇ出してるからな」
「そっちじゃなくて、よくもまあ女の子をそんな躊躇い無く殴れるなと」
「いや、多分お前だって出来る」
「……」

　確かにその通りかもしれなかった。でもどうだろう？　僕は誰かを傷付けるくらいなら自分が傷つくかな？　あんまり女の子のそう言うの見るのは嫌なんだ。
　だからだろうな。

「今のうちだ夢、逃げるぞ」
「待って」

　宝島のその言葉に同意する気持ちにはどうしてもなれなかった。
　壁に体重を預けてぐったりと座っている橋場小子に近づいた。
　近づいたのはなんてことはない、彼女と友達になりたかったのだ。
　こんな彼女でも、僕は同じ人でなしとしてとても惹かれていた。

「おい夢！」

　宝島の叫ぶ声がしたが当然のように無視をする。勿論、危険なことは分かっている。けど、それでも僕は彼女と友達になりたいんだ。

彼女と視線を同じ高さにする為に僕もしゃがむ。彼女の空ろな両目が僕の方に向いた。
さっきは地味目な女の子なんて評したけど、近くで見ればそうでもない。歳相応に可愛らしい容姿をしている。ただ、宝島に二度殴られた所為か、顔面の左のこめかみが若干腫れていた。
ごめんな、痛かっただろうに。
僕はそう口に出す代わりに、彼女の頭を撫でてやった。薄く眉が動いたが、反応らしい反応はそれだけで後は僕が彼女の頭をずっと触っている状況になった。
うわ、髪がすげーさらさらだ。
続いて僕は言う。唄うように。

「僕と君は同類だ」

すると今まで大人しくしていた彼女に急に動きがあった。
僕の体を抱きしめるように捕まえたかと思えば、僕の首筋に獣のように、噛み付いた。
それは冗談や遊びではなく、本気の噛み付きだった。当然のように血が溢れ出る。服に血がだばだばと流れて染みになっていく。洗濯で取れるかなあ？
そして僕は唄うように続けた。

「大丈夫。僕は君の味方だ。僕は君の友達だ。僕は君の仲間だ。僕は君の同士だ。
そして僕と君は、同じだ」

依然として彼女の口の力が弱まる気配が無い。そんなことをしているうちに彼女が僕の首を噛み切ってしまいそうだ。おーい宝島、救急車呼んでくれ。と言おうとしたら宝島はもうすでにこの病室のどこにもいなかった。何一人で逃げてんだ。

って言うか、ここ病院じゃん。
そんなことも分からなくなってきた。当然だ。頭に回る筈の血液は殆ど、ここで彼女によって外に放り出されてしまっているのだから。
それでも僕の声帯や舌、それに唇の動きだけは止まらなかった。多分もうすでにこいつらは僕の意思とは無関係に動く一つの生物として成立しているのだろう。
なので僕は僕の口に全てを任せることにした。
唄うように言う。

「君は人とは相容れないかもしれない。でも僕となら気が合うだろう。君は一生人間の友達は出来ないかもしれない。でも僕となら友情だってなんだって育めるはずだ。君はみんなの嫌われ者かもしれない。でも僕は、僕だけは君のことがこんなにも、愛おしい」

だって僕も君と同じ人でなしだから。
殆ど無意識の中で僕は唄った。
彼女を最初に気持ち悪いと称したのは嘘ではないし取り消すつもりも無い。
ただ、気持ち悪いと思うと同時に、美しいとも思った。おぞましいと思うと同時に麗しいとも思った。恐ろしいと思うと同時に愛おしいとも思った。もしかしたらひょっとすると僕は彼女のことを好いているのかもしれない。
すると先ほどまで噛み付いていた橋場小子が、僕の首から口を離した。
しかし顔の場所を戻し、互いに見つめあっていると言う状況にもかかわらず、橋場小子の目は睨んでいるようにしか見えなかった。

「だめ」
「え？」

「……信じられない」

彼女は静かに、しかしはっきりと僕にそういった。口元を僕の血液で真っ赤にしながら。

恐らく彼女は何度も信じ、裏切られてきたのだろう。それは親友だったかもしれないし恋人だったかもしれないしはたまた家族だったかも知れない。それをいきなり今日が初対面の奴に信じろなんていわれても無理があるというのは僕でも分かる。

だが彼女はそう言っているが、僕はまったく脈なしだとは思っていない。本当に、心の底からそう思っているのなら、彼女は真っ先に僕に止めを刺すべきなのである。それをしないということは、彼女にも迷いがあるということ。

雨屋夢は本当に橋場小子と同じかもしれない。

彼女は今、揺れている筈だ。だったら分からせてやれば良い。

雨屋夢は本当に掛け値なく少しの狂いさえなく橋場小子と同じだ、と言うことを。

僕は右手を握った。

良かった、あの時ひろった彼女の彫刻刀はまだ手放していなかった。

「見てて」

僕は彼女に微笑みながらそう言った。もう唄ってはいない。

僕と彼女が同じだということを分かりやすく示す方法。

簡単だ。彼女と同じことをすれば良い。ただし全く同じと言うのはオリジナリティにかけるし何よりインパクトが無い。彼女が喜んでくれるかどうか分からない。

僕は数秒の考察の後、場所を決めた。

自分で自分を傷つける場所を。

僕の、いや彼女のか。彼女の彫刻刀は僕の意思によって僕の右の眼球にあてがわれた。

僕は精一杯目を見開く。今日で右目から見るこの景色も最後だろう。

僕の右目が最後に見たのは、始めて見る彼女の笑顔だった。

僕の右の目の視力は、この日、彼女との関係と引き換えに完全にその機能を失った。

犯人は誰？　エンディング

「成る程成る程。
「いや、まさか本当に夢ちゃんってばこの音楽室に来てくれるなんて思ってなかったからその意味も込めてね。しかも一人で。
「てっきり私のこと嫌いだと思ってたけど。
「あ、嫌い？
「でもそうよね。約束は約束、等価交換は等価交換、貸しは貸しだもんね。まあでもついこの間橋場小子の情報貰う為に一人でここに来たくらいだからそこまで期待してなかった訳じゃあないけどね。
「で、暫く学校休んでたと思ったら眼球くりぬいていたの？　随分やることがぶっ飛んでるわねえ。嫌いじゃないわ。
「眼球自分で傷つけて、それで右目の視力を失って、お医者さんに行って、で学校休んでたわけ？
「でも眼球くりぬいた後と言えば昔の海賊船長よろしくアイパッチかと思ってたけど、そうじゃないのね。それ、中に偽者の眼球が入ってるの？　ああそうなの。いや、取らなくて良いわよ。気持ち悪いし。
「それでもやっぱり不自然感はぬぐえないわね。まあ遠くから見る分には大丈夫だけど。
「あ、それで橋場小子のこと？　うん、そうよ。あなたたちと同じ人でなしよ。
「ちょっと、そんな目で見ないでよ。あなたはどうせ知ってたんなら教えろって言うつもりかも知れないけど、どうかしら、あれだけの情報でそんな物語の核心的な部分を教えるなんて大安売りにも程があると思わない？
「でも一応ヒントは得あげたつもりだったんだけど。運動も勉強も全部駄目とかあなた達人でなしの最も分かりやすい特徴じゃないの。彼女は典型的なタイプね。

「そこまで考えが至らなかったあなたが悪いわ。
「まあ私は彼女が人でなしって知ってはいたけれど、それでも犯人も彼女なんて思わなかったわね。
「人でなしの考えることなんてさっぱりだわ。
「理由はそうね。大方、あなたと同じ様に日常に刺激が欲しかったか。別にいじめが堪えてた風は無かったから、それを苦に自殺ってことは無いでしょうけど。
「でもたったそれだけの理由で自分の体に穴を開けるなんて私は考えられないわね。
「ん、あなたは似たようなことしたことある？　ああそう。やっぱりあなた達は皆そうなのかもね。私は別に理解しようと思ってないけど。
「それより聞いた？　夢ちゃん。橋場小子、またいじめが再開されたらしいわよ。
「まあ再開って言うと一回休んでたみたいに捉えられちゃうけど、入院中は無かったからこの言い方で良いわよね？
「で、あの子の友達で同類のあなたはどうするの？　止めさせようと奔走する？　熱血になる？　やるんだったら私は協力しないことも無いけど。
「……そう。冷たいのね。
「別に悪いって言ってるんじゃないわよ。それがあなたの結論なら私が口出しする関係じゃないし。ただ、あなたと橋場小子って友達じゃあなかったの？
「……うん、そうよね。友達よね。じゃあなんでそんなこと言うの？　あな達の中じゃあ普通のことなの？
「いや、分からないって……、言い方を変えましょうか。あなたは自分の友達が虐げられている姿を見てなんとも思わないわけ？
「……何も思わないんだ。
「……いや、良いわ。もう何も言わないで。なんだかやっとあなたと言う存在がはっきりした気がする。

「あなたは自分が全てなのね。
「友達が欲しいのも自分が寂しいから。出来る奴が嫌いなのも自分が見下されるのが嫌だから。日常が嫌なのも自分が退屈だから。
「あなたって本当に……なんというか……そう、人でなしね。
「笑わないの。
「褒めてないわ。
「まあ良いわ。あなたがそう言うつもりなら。ただの情報屋の私は傍観に努めましょう。
「私も熱血なんてガラじゃあないしね。

コンコン

「ん？　ああ、お客さんみたいね。
「夢ちゃん、ちょっと悪いけど外してくれないかしら。次のお客が来たみたいだし。
「問題ないって、夢ちゃん、それどういうこと？
「あ、入って頂戴。

ガラガラ

「ん？　あなたは橋場小子？
「おかしいわね。あなたはこの場所知らない筈なのに。
「迎え？　夢ちゃんの？　なに、あなた達そう言う仲なの？　付き合ってるの？
「ああ、ただの友達。
「自分の目、代償しにしただけあって随分懐いてるみたいね。
「もう行くの？　そう。

「じゃあ夢ちゃん、また面白い話聞かせてね」

人は人しか殺さない　1

例えるならば僕らは深海魚に似ている。
僕らの生きている場所は深く、光も届かない暗闇で、めったに仲間に出会えることは無い。そこはおおよそ生きていくには酷く苦しいが、僕らはそこにしか住めないのだ。仲間を求めて海面付近に行こうものなら僕らはそれだけで光さえ見ることなく死んでしまうだろう。僕らは光や華々しさに嫌われていて、暗くておどろおどしい環境がお似合いだ。
しかも環境に順応する為に命がけで変化していった姿形は、上の奴等から見ればどうやら気持ち悪いと蔑まれる物らしい。

とまあ語ってみたが実際はどうだろう。深海魚は別にそんな劣等感なんて感じてないだろうしなあ。というか僕、魚に詳しくないし。
それに奴等の気持ち悪いと僕らの気持ち悪いはなんか違う気がするし。

なんで僕が今そんなことを考えているかと言うと、目の前にそう言う奴の代名詞とも言える橋場小子がいるからだ。

「夢。はい」
「ｙｏｕ　ｍａｙ？」
「ちげーよ、無理矢理英語に変換するな。夢、雨屋夢だ」
「ａｒｅ　ｍａｙ　ｙａｅｒ　ｙｏｕ　ｍａｙ？」
「うん、面倒だからもうそれでいいや」

この間の一件で僕は右目を失った。
事故でも事件でもなく自分の意思でだ。
僕はその結果得られた物に満足しているし、片目になったからと

いって日常生活がどう変わる訳ではない。
もとより好奇の目で見られるのには慣れているのだ。

ただ、やっぱり目が片方しかないと遠近感が掴めなくて、それは即ち体育などで球技系の運動が片っ端から出来ないことを意味する。
まあ元々運動神経皆無だから気にしてはいないけど。
それでも方目が見えないという分かりやすいハンディキャップは、体育をサボるのには重宝している。

そんな訳で今僕は保健室にて何故か良く分からないがベットで寝ていた橋場小子と日本語のお勉強中だった。もしくは英語のお勉強。
いや、13年間日本人として生きてきた女の子を相手に日本語のお勉強と言うのも変な話だが。

「メイ」
「それはもしかしてだが僕のことを指しているのか？」
「メイ」
「……なんだ」
「出掛けたい」

出掛けたい？　何だそれは。今の授業その他諸々を投げ出してどこかに飛び出したいという意味で捉えて良いのか？　というかなぜそれを僕に。

「出掛けたい」
「いや、それもう聞いたから」
「外の世界に飛び出したい」
「……はあ、どうぞ」
「一緒に」
「一緒に！？」

「今じゃなくて良い」
「うん」
「休日とかで良い」
「おお」
「二人とかで良い」
「ああ」

えーと、ああああれだなこれは。多分間違ってないと思うけれどしかしどうだろうか、これで間違ってたらものすごく恥ずかしいけどまあ言っちゃおう。どうせ相手はここだし。

「あれか、つまりデートがしたいのか」
「でぇと？」
「うおい、まさか意味を知らないとは思わなかった。遠まわしな言い方だなあとは思ったけどそれが真相か」
「でぇとはいい。出掛けたい」
「……うん、まあそうだな、出掛けるか」

そもそも僕らは付き合ってるわけではないのだし確かにデートは適切ではないか。しかしなんだな、初登場時からあんまり喋らない奴だなあとは思っていたがまさかここまでのレベルで日本語が不自由だとは。恐るべしは人でなしだな。
ふむ、しかし出かけるのか。しかも女の子と。これは僕の１３年の歴史を紐解いてみても今まで全く存在し得なかった驚くべき出来事で、もし仮にこれが達成されれば僕はリア充になれるんじゃないかしら？
そう考えるとなんだが背中がわきわきしてきた。無駄に大声を出したくなってきた。が、自制する。ここ保健室だしね
いや、でもなあ、相手がいじめられっ子じゃあなあ。まあ僕に相手を選ぶ権限なんて国から与えられていないからしょうがないとい

えばしょうがないんだけどね。

そんな感じで体育の授業も終わったので僕は保健室から出て、授業に戻ることにした。

わっしょーい。保健室のとびらを開ける。

「お、夢じゃん。そういえば体育で見てないと思ったらこんなところにいたのか」

するとそこには僕の知り合い一歩手前の宝島がいた。

こいつはまあ運動も出来るし普通にエンジョイしてたんだろうなあと心に思う。口に出すと僻みっぽくなるのでいわないけど。

つーかなんでそんな奴が保健室に。今の話を聞く限りどうやら僕がいるのを知ってここに来たわけじゃあなさそうだけど。なんだ、怪我でもしたのか。だったら諸手を上げて喜ぼう。

と言う思考は宝島が隣に人を担いでいるのを見て一気に消えてなくなった。ち、まあいいか。

「そいつ、怪我したのか？」

「ん、まあな」

僕が言うところのそいつは僕らの学校の指定ジャージを着ていて、恐らくは今まで体育をやっていた同級生であろうと予測は出来るのだが、残念なことに僕はクラスの人間を全員は覚えていなく、そいつは更に残念なことに僕が覚えていない側の人間で、本当にクラスメイトかどうかは本人、もしくは宝島に聞いてみないと分からなさそうだった。

しかし本人に聞こうにも僕にはそれがどうやら出来そうもなかった。

いや、勿論僕の対人スキルが異常に低いこともその原因の一端を

になっているがそれ以前に彼、つまり宝島に担がれているその人は、意識を失っていたのである。
　これが俗に言うところの気絶と言う物であろうか。初めて見た。寝てるのと見た目には変わりないのでもしかしたらただ単に寝ているだけかもしれないが、退屈な座学の授業ならともかく体育の授業の最中に寝るなんてことはまず考えられないので気絶したが順当だろう。
　頭から血でてるしな。

「大丈夫なのか？　救急車とかは」
「んー？　知らないけど大丈夫だと思うぜ」

　自分のことじゃないしな。宝島にとってもどうでも言いのかも。

「つーか体育で一体何があったんだ。と言うか寧ろ体育で何をしたんだ」
「普通にサッカーだぜ」
「中学校レベルのサッカーで頭を怪我する理由を教えて欲しい」
「思いっきり蹴るんだ。狙ってな」

　宝島は担いでいた生徒を少々乱暴にベットの上に落とすと、そう言った。
　因みにここはもうすでに保健室には存在しない。宝島の姿が見えたと同時に普段ののろさはどこへ置いていったか、新幹線も真っ青なスピードでどこかへ消えてしまった。
　宝島はここを苦手としているし、ここもまた宝島を苦手としている。なぜだろうか。

「狙ってって、それってわざとってことか？」
「今度の練習試合さ」

宝島は俺の言葉を完全に無視して別の話をし始めた。いや、ここまで言って隠すのは無しだろう。

「今度の練習試合さ、俺レギュラー落とされたんだよな。で、代わりに出るのがコイツ」

保険室に寝ている生徒を顎で指しながら言う。

成る程。関係ない話ではなかったようだ。宝島は自分が試合に出たいが為に我がクラスメイトを事故に見せかけて（見せかけたかどうかは怪しいが）リタイヤさせたという訳か。

「やることがもう悪人通り越して罪人だな」

「褒めるなよ。照れる」

「真顔で何を言う」

ここで本来言うべき言葉は「褒めてねーよ！」の筈であるがお生憎様、僕自身少しとは言え前述の言葉に多少の尊敬の意は込めてある。

僕も出来ることならしてみたい。まあ僕の運動神経じゃあまずもって足が頭に届きさえしないだろうけど。

「つーか狙うなら普通足とかじゃねえか？　狙いにくい上に事故でしたじゃあんまり言い訳立ちにくそうだけど」

こういう会話が成立している時点で僕は人として結構終わってる気がする。

「本当はそうでもよかったんだけどな。イラッとしたから思わず」

「やっぱりお前犯罪者だな」

そんな会話もそこそこに、
流石に時間も時間なので僕らは自分達の教室に戻った。残念なことに授業はまだまだあるのだ。
勿論宝島と仲が良いと思われては困るので別々に移動した。

体育の次の授業は算数改め数学だった。
僕は授業を綺麗に受け流しながら、今週末に思いを馳せた。
休日に誰かと出かけるとか一度も経験のないことなので想像するのにだいぶ苦労したが、まあそれはあっちだって似たような物だろう。僕ばかりが恥をかく訳ではない。
なんだかんだ言っても僕だって13歳。遊びたいお年頃である。
これで心躍らない訳が無く、無意味に興奮してしまった。
数学教員の大きな声も心地が良い。脳が直接マッサージされてるような気分になり、ふらふらしてきた。今立ったら倒れる自身が僕にはあった。
それと同時に獰猛な睡魔が僕を襲う。

運動神経皆無な僕がそれに対抗できる筈も無く、僕はあっけなく屈してしまった。

しかしそんな幸せ一杯の気分はここで終わりを告げる。
僕の始めての仲間との外出は、あまり心地の良い物とは言えなかった。

勿論このときの僕は知る由もないが。

人は人しか殺さない　二

日曜日、待ち合わせ場所は僕の家だった。
こことの会話で僕とここの家が意外と近いということを知った僕らは「じゃあ下手に待ち合わせするよりどっちかの家によってった方が良いね」という結論になったのだ。
なにが良いねなのかと言うと、万が一外に待ち合わせ場所を指定してここをいじめてる奴等にでもあったら大変なことになる。主に僕が。もしかしたらとばっちりでいじめられちゃうかもしれないし。
ここで「そういう状況だったら小子を助けてやれよ」とか言う奴は分かってない。残念なことに僕の筋力は女子にも劣るのだ。はっはー、自慢になんねえ。

そう言うわけでわくわくして夜もロクに眠れずにいた僕は、そろそろ来るであろうここを自分の家で健気に待っていたのだ。
因みに僕がここの家に行くよーと言うことを最初に提案したのだがばっさりと断られてしまった。まだそこまで信頼関係は築けていないらしい。
でもあっちは僕の家を知ってるのに僕ここの家を知らないなんでなんだがフェアじゃないなあ。こんど御船先輩にでも聞いてみようかな？

「っていうか遅せえ……」

確かここが家に来る時間は9時と設定していた筈だけど、もうすでにそれから30分以上過ぎている。何かあったのか。こことの連絡手段を持たない僕はただここを待ち続けることしか出来なかった。
さっき言ったようにここの家の場所知らないしね。
すると、緊張がほぐれたのか段々眠気が襲ってきた。昨日殆ど寝

てない所為もあるだろうが。
　しかし僕は負けない。確か前回睡魔に負けた気がするがそれとこれとは状況が全く違う。なんせ僕は今人を待っているのだ。ここが何をしているか分からない今、確かに僕が寝ていてもここにはなんの障害も無いだろうが僕のこの気持ちが許さないのだ。あちらで何が起こっているのか知りも出来ないのに何を一人でのうのうと寝ることができようか。いやできな……

「見ろ！　センチャロウクアナだ！」「と言うことは近くに昼夜トカゲが隠れている可能性があるな」「水筒の中身は蜂蜜かウーロン茶ですか？」「馬鹿野郎！　昼夜トカゲはおやつに入らないってあれほど言っただろうが！」「大変です、僕が迷子になりました」「ではみんなで探さないとな。手分けして探してこいつを見つけたら大声で俺を呼んでくれ」「僕は喉が潰れて声がでません！」「では仕方ない。お前だけは声を出さずに口パクをしていろ」「そんなんで合唱コンクールで優勝できると思うなよ！」「仕方ない、こうなったら最後の手段だ」

　体が揺さぶられている感じがした。

「起きて」

　とても人を起こそうとしているとは思えないか細い声が聞こえた。間違いない。これはここだ。

「うお、眩しい……」

「おきた」
「うん」
「寝汗、すごいよ」
「なんか変な夢を見たような気が」

どんな夢かはいまいち覚えてない。たしか誰かと遠足とかに出かけてたような？　違うかな？
因みにここは、当たり前だが私服だった。まあ予想通り上から下まで真っ黒だったけどそれは僕が言えたことじゃないので特に詳細は言わないことにする。似合ってるしね。

「っていうかなんでここいるの？」
「お父様とお母様が入っても良いって」
「なるほ」

父さんと母さんには言ってなかったからなあ、今下に下りたら質問攻めとかされそうで嫌だなあ。

「……わり、ちょっとシャワー浴びてくる」
「うん」

それでも流石にこの状態のまま出かけるのは憚られたのでシャワーと、ついでに着替えもしようと思った。僕は僕の部屋を見ながら時計を見ると６時を過ぎていた。

「マジかよ！」

思いっきり叫んでしまった。でも仕方ない。

「ここ、お前うちに来たのって何時？」

「1時？」
「遅いな、まあそれ良いとして、1時から今までの5時間なにしてたの？」
「見てた」
「……何を？」
「ゆめ」
「……なんで？」
「寝てたから」
「……」

起こせよ！　そう言いたいがここの純粋無垢な表情を見ていると怒鳴るこっちの方が悪者にしか見えないであろうからやめた。どうせ言ったってもうしょうがない話なのだ。

「ん、じゃあなんでさっき起こしたの？」
「トイレ」
「あ？」
「借りたいなって」
「ああ、どうぞ。階段降りて右手です」

そう言うとここはぱたぱたと早足で僕の部屋から出て行った。
じゃあここはもし自分がトイレに行きたくならなかったら僕が起きるまで待っているつもりだったのだろうか？　逆に行きたくなったらなったでどうせまだ下にいる両親とかに許可を取れば良いのに。一体どういう教育を受けてきたんだあいつは。
いや、まあ確かにここ見たいに消極的な奴が今日はじめてあったばかりの大人に自分から声をかけるなんて相当勇気の要ることか。

しかしどうするかな。この時間じゃ当初予定していたプランを大幅に変更しなくてはいけなくなる。まあ時間も時間だし日を改める

って手も無いわけじゃないが今までそれじゃあ待っててくれたここに申し訳ない。

もうこんな時間だしどっかに夕飯だけ食いに出かけるか。まあ夜からでも楽しめるようなスポットがここら辺にもあるのかもしれないが、生憎僕はそれをまったくと言っていいほど知らなかった。

まあこんな時間から遊びに出かけるの事態初めてだし、しょうがないとしておこう。

「ゆめ」

そんな声がしたと思ってみてみれば、やっぱりそこにはここがいた。まあ普通に終わってここに来たんだろうけど。

「ん、じゃあ行くか」
「いく？」
「いやいや、今日の目的はどっか出かけようぜだっただろ」
「そっか」
「忘れてたのかよ」
「ん」

いや、別段自宅にずっと居るってのもありっちゃあありなんだけど、親が居るからな。絶対あいつ等面倒だ。

そんな訳で、僕らは親にばれないようにこっそりと自分の家を出て行ったのだった。

まあばれたけど。

あいつらの嗅覚半端じゃない。

「で、なんか食いたい物とかある？」
「無い」
「即答すんなよな……会話が続かないだろ」
「……無い」
「いや、ためがあれば良いってもんじゃないけど」

夕方なので人もそこそこの商店街を僕らは二人並んで歩いていた。この時間だと主婦かじいちゃんぐらいしかいないから同級生などに会う心配は無い。
つーかこいつ、なんでお出かけ誘ってきたんだろう？　いや、まあ嬉しいけど特に目的とかがあったわけじゃないんだな。
うーん、人でなしの考えることは分からん。
僕が言うことじゃないけど。

「あれ？　そこに居るのは夢ちゃんじゃない」
「ゑ？」

驚いて古文的な表現になってしまった。申し訳ない。
いや、同級生には会わないなーとは思ったけど、まさか先輩に出会うとは。

御船御影。我が中学二年、知る人ぞ知る情報屋が商店街を歩いていた。
買い物袋を持って。

「相変わらず文章力無いわねえ。そもそも私が今私が今私服でいることやその私服のセンスが意外と良くてこの商店街では浮いていること、そして夢ちゃんが一瞬ドキッとしてしまったことを最低限描写しないと駄目じゃない」
「地の文にケチをつけないで下さい」

あんたは一体誰なんだ。
そしてドキッとなどしていない。本気で。
「照れてないで素直になりなさい」
「だから地の文読むんじゃねーつってんだろ」
思わずタメ口になってしまったが仕方ないと僕は思う。
「っていうか先輩、こんな所で何してるんですか？」
「商店街といえば買い物以外ありえないでしょ。買い物よ」
「えーと、失礼ですがその中身を見てみるに主婦？」
そうなのだ。御船先輩の買い物袋の中には食材や日用品などおおよそ女子中学生とは思えないラインナップだった。
「そんなところよ。まあ家庭事情がいろいろあってね」
珍しく言い澱んだ言い方になる御船先輩。まあ特に深くは追求しないが。
「あ、そういえばさっき北公園で面白い物見たわよ。行って見なさい」
「分かりました。行きません」
この人が言うのだからきっと面白くないものだ。しかもタダで提供しやがった。絶対何か考えてる。
「つれないわねえ。まあ良いけど」

結構あっさり引くんだな。そのほうが助かるが。
「じゃあ私はこれでね。ちゃんと夕飯までには帰るのよ」
「あなたは僕のお母さんですか」
そもそも夕飯を食いに行くのだ。
そんなことを言いながら御船先輩は薄暗い商店街の中に消えていった。
「ん」
と、何かに引っ張られる感覚。
ここが僕の服の袖を引っ張っていた。
「あの人」
「何？」
「私のこと見えてない」
あー。
あれは多分意図的に無視してんだと思うんだけど。
前にここを音楽室に連れてった後怒られちゃったからなあ。いくら御船先輩といえど、橋場小子相手では気持ち悪いという感情が先行してしまうらしい。
故に近づきたくない。
曰く、「暗い部分に目を通すのは良いけれど、首を突っ込むことまではしたくない」
だそうだ。
僕や宝島は暗い部分。
ここは、暗黒？
なんにせよ、僕や宝島でさえも悪い意味で格が違うのが橋場小子

と言う人間だった。
いや、人間ではなかった。か。
なんにしても酷い話である。
たとえ人でなしだとは言え、生きていることは生きているのに。
だから。
「あの人意外と緊張しいなんだよ。今度はここから話しかけてやりな」
僕は嘘をついた。
罪悪感など無い。
「いや」
それでもここは、知っていた。
「なれてるから」
自分が人でなしであることを。
「……そっか。じゃあ、気を取り直していこうか。食事。ここが何でも良いって言うならファーストフードで良い？　結構最近はクオリティ高いの多いんだぜ？」
僕は出来るだけ明るく言った。
誰にも気持ち悪がられないように。
「うん」

それに答えるここも、少しだけだが楽しそうに見えた。

人は人しか殺さない　？

その後僕らがどうしたかと言うと、普通に全国にチェーン店が数え切れないほどあるとあるファーストフード店に言って夕食を済ませようとした。

しかしさっき知りあいにあったばっかりなので、警戒はしておいて損はない。寧ろ進んでやるべきだと僕は取り合えずその店の中を意味も無く一周した。いや、意味も無くでは無いんだけれど。

高校生らしき人たちが3組と浮ついたカップルが一組。僕らの知り合いはどうやら居ない。良かった。

「しかしあれだな。お前それだけで足りるのか？」

注文も終わって僕らが食事を始める頃、僕はここに聞いた。

なにせこの子、ポテトしか頼んでいなかったのだ。Mサイズ。

僕も男子にしては食の細い方ではあるが、流石にそこまで食べないと不安になってしまう。

「ん」

「さっきから結構気になっているのだが、その『ん』って肯定で良いんだよな」

「ん」

「……そう」

足りるらしかった。

しゃくしゃくと一本づつフライドポテトを食べるここを見ながら僕もハンバーガーを口へ運ぶ。

家族以外の誰かと食事をするのは初めての経験なので（勿論給食は除く）いまいち勝手が分からない。会話とかどうしたら良いんだ

ろうか。食事中だし喋らないほうが良いのかな？　いやいや、そんなことは無いだろう。ただでさえもう時間があまりないというのにそんな消極的でどうするんだ雨屋夢。
でもなあ。この子あんまりどころじゃなく喋らないからなあ。どういった話題を振りまけば良いことやら。振りまく？

「そういえばここって兄弟とかいるの？」

ここは無難に家族関係の話題にしてみた。
因みに僕は兄弟は居ない。一人っ子だ。

「……」

睨まれた。
地雷踏んだか？
なぜか知らないがこの話題はここにとって気持ちの良い話題ではなかったらしい。めんどくさいな。結構無難なとこから行ったつもりだったけど。

「……ごめん」

とりあえず謝る僕。理由は分からずとも相手を不快にさせてしまったのなら非は僕にある。というかこんなことでせっかく築いた関係を壊したくなったのだ。
基本的に僕は下手に出るのをコミュニケーションの基本としている。

「良いよ」
「あ、許してくれるんだ」
「怒ってないし」

「じゃあなんで睨んだ」

しまった。咄嗟のことでついけんか腰の口調になってしまった。
僕は内心ひやひやした。しかしそんな僕の思いを知ってか知らずかここはあっけからんと答えた。

「睨んだ？」

自覚なし。もしかしたらさっきのそれは起こっているのではなかったのかもしれない。というかまあ本人がそう言うならそうなのだろう。

「……睨んだ……」

ここが繰り返して呟く。
腕を組み、首を傾げる。さっきの自分の表情を自分の中で思い出すような、そんな表情だった。
本人にはそんな気は毛頭無いだろうが、その表情が普段見ることないような真剣な表情で僕は不覚にも笑ってしまった。おかしかったからではない。可愛らしかったから。つい、である。
でもそんな顔をここに見られるわけにもいかず、僕は必死ににやけそうになる顔を平静に保とうとしていた。まあ無理だったが。

「ん」

五十音最終単語の一文字だけで会話をしようとするのは世界広しと言えどもここだけであろう。（そんなこと無い）
そう言う訳でここが声をかけで来た。
自分の顔を無表情にすることに精を出していた僕がその突きつけられた存在に気づくのはその一瞬後だった。

ここが突き出してきたもの。ポテトだ。
フライドポテトのMサイズ。その中の一本。

「え？」
「ん」
「くれるの？」
「そう」

あ、そこは『ん』じゃ無いんですね。
それも言いたかったがもっと気になることがあったのでそちらを優先した。

「なんで？」
「お詫び」
「お詫び？」
「睨んだから」
「え？　睨んだお詫び？」
「ん」

いやいや、そのくらいでお詫びなんていらないですよー。とか一瞬思ったがそんな断る程のお詫びじゃあなかったので素直に受け取っておくことにした。
そもそも僕が注文した中にもフライドポテトあるんだけどなあ。

「ありがとう」

一言お礼を言って僕はそのポテトを口に咥えた。

「っ！！」

「……！！」

ポテトの塩気が僕の舌を支配した瞬間に気付いた。

僕は素晴らしい過ちを犯してしまった。日本語が変？　いや多分これであってる。

僕はここが差し出してきたポテトを僕の手を経由せずに口に運んでしまったのだ。これがきっと俗に言うところの『はい、あーん』現象だ。カップルのよくやるやつ。

恥ずかしっ！

ここは完全に口と目が限界まで開いて、驚きを表現している。顔の色はトマト投げあい祭りの直後ではないかと疑うくらい真っ赤である。僕もきっと口以外は似たり寄ったりな表情だろう。

こんなことドラマや小説、はたまた自分の妄想以外では初めての経験なので（１３年間友達すらまともにいない故、当たり前である）こういう風に驚くことしか出来ない。

普通の人ならここまで反応しないかもしれない。うん、そうかもしれない。

でも残念なことに僕らは対人スキルが著しく乏しく、他人との会話の経験が考えられないほど少ない人でなしだ。こんなラブラブカップルわっしょーいみたいな状況で平静を保っていられるはずが無い。

寧ろ失神しない僕を誰か褒めてほしい。

因みに先程から約３０秒、僕らは固まったままである。

体が石かコンクリにでもなったように動かない。いや、問題なのは体でなく頭か。頭が空っぽで何も考えられない反面、今までの１３年間の記憶が僕の中を駆け巡る。これが走馬灯か。

え、僕これで死ぬの？

「そんなわけにはいかない！」

先に沈黙を破ったのは僕の方だった。

ここの小さな指からポテトを引き抜いてもぐもぐと租借する。

「あ」

ここも復活する。顔は今だ赤いままであるがそれはきっと僕も同じなので言わないことにする。

それからは僕とここは無言でお互い食事を済ませた。

なんか若干気まずさま増した気がするが、不思議と悪い気はしない。

そんな訳で、今日。僕とここの距離は若干縮んだのであった。

こことの楽しい食事会も終わり、男性である僕がもう夜遅い帰り道、ここの帰路に付き合うのは当然のこととといえよう。

その過程でたとえさっきあった御船先輩の言っていた北公園があったとしても、そこを通るのはまあ必然といえよう。遠回りするには時間が遅すぎる。もう十時を過ぎている。多分補導員に見つかったら補導される。

そんな訳で、さっき御船先輩が言っていた『面白いこと』と言うのは若干頭に引っかかる物があったが僕はそれを忘れた振りをして北公園の前を通り過ぎようとした。

なにせ御船先輩に言われたのはもう何時間も前である。その『面

白いこと』ももうすでに終わっていようと高をくくったのだ。

街灯も殆ど無い北公園は不気味な雰囲気に包まれていた。

当然、そんなところに人通りなどあるはずが無い。

しかし僕らはそこでそれを見てしまった。

暴力。

それは単純な暴力。

北公園の真ん中で、その一方的な暴力は繰り広げられていた。

片方は大人、片方は子どもだった。

当然暴力を振われているのが子供の方で、しかし僕らはそいつを知っていた。

そいつの名前は知っていた。

宝島減太。

それが血まみれになっている子どもの名前であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4786x/

そう言う僕らは人でなし

2012年1月2日03時48分発行